

MAPPS ゼミ ②

博物館システムのあるべき姿とは

添付資料 ② も併せてご覧ください。

文部科学省の調査によれば、野外博物館および動物園・植物園・動植物園・水族館を除いた全国の博物館の総数は5,179館とされている。そのうち、総合・科学・歴史・美術の種類別の比重は、以下の通りとなっている。

① 総合博物館：8% ② 科学系博物館：9% ③ 歴史系博物館：62% ④ 美術館：21%

※平成17年度「社会教育調査」より算出

◎ 図書館と博物館の違いは「標準」の有無

登録博物館に相当施設、類似施設まで含めた「博物館」には、歴史薫る神社仏閣の宝物館が今も残る一方、近年ではロボットや漫画・アニメーション専門といった新しいジャンルのミュージアムが増加するなど、分野的な裾野の拡大はますます進行している。加えて、同じ分類に属する館でも、地域性・時代性・表現手法など扱う収蔵品の傾向によって管理方法・内容が大きく変化する。

出版業の発展とともに商業的な必要性から定着した項目体系をベースに管理が行われる図書館とは異なり、個別の収蔵品に対する学際的な情報の取り扱いも必要となる博物館の情報管理では、学芸業務にまつわる履歴情報や知見の記録まで視野に入れる必要がある。その多様性を考慮すれば、管理システムの標準化は相当に困難であると言える。

博物館システムの構築現場では、こうした事情への配慮が欠けた状態で議論が進むケースがままある。その理由は、分野あるいは館固有の項目の発生を考慮しないASPサービスに代表される通り、主に博物館システムに対する開発業者側の認識が「デジタル資料の保管倉庫」という範囲に留まり、適切なアドバイスを送れないことが多いためである。

また、「現場実務に即した仕様・機能体系」を標榜するシステムにおいても、複雑極まりない博物館運営の業務理解が浅く、設計思想を細部に反映し切れていないケースも目立つ。開発業者の目から見れば、博物館はビジネス市場として小規模に留まるだけに、それも無理もない話ではある。

◎ 学芸業務支援こそ博物館システムの本質

分野によって業務内容が極端に異なり、地域によって扱う収蔵品の傾向が異なり、さらには館によって業務体系が異なる博物館のシステムを、個別に開発するのは骨が折れる作業である。しかも、資料によって保管方法が異なり、加えて施設・設備によって管理手法も異なる中で、学芸員や職員の要望にまで対応しなければならぬのだから、コスト高になっても当然と言える。

それでも、館の業務に即していなければ導入の意味がなくなるため、「使えるシステム」づくりは必須である。たとえば、最も要望頻度の高い「管理項目の調整」ひとつを取っても妥協するわけにはいかない。館の情報管理体系に合わないシステムでは、登録・閲覧の習慣が身に付かず、結果として「メモした方が早い」という状況に陥るためである。

つまり、博物館システムに必要なのは、館の日常業務で使えるだけの業務支援性の確保であると言える。現場ではあらゆる場面で資料情報を参照する機会が生じるが、同じ情報を何度も繰り返し書き出すなどの無駄を省き、事務処理作業を軽減してより専門業務への比重を高めることこそ、博物館のIT化の本質でなければならない。

よって、自館の性質に合わせた仕様づくりが最も重要となるが、それには開発者側が、博物館業務の細部にわたる知識を有していることが前提となる。これをなくしては仕様検討の議論もままならず、また、コストダウンへの方策を導くことも困難となるからである。

Points of View

- 複雑極まる博物館のシステム構築には、開発者の業務知識が必須
- システム導入の最大の意義は、館運営・学芸業務の支援にある

